

図書館だより



No. 8

平成30年11月30日

今年も校門から校舎へ続く、イルミネーションが綺麗に輝き始めました。日が落ちるのが早くなった冬の夕暮れが明るい光に包まれて、しばし寒さを忘れさせてくれます。今年は暖冬との予報が発表されており、札幌の初雪も観測史上最も遅かった明治23年(1890年)に並んだということです。確かに体感的にも「いつものこの時期に比べて暖かい」という日が多い気がします。それでもやっぱりこの季節の朝は、暖かい布団から出るのに苦労しますよね。



冷えは女性の体にとって大敵ですから、日常の様々なシーンで体を温めることを意識して過ごしましょう。

さて、今年もあつという間に12月となりました。期末テストに励んだり、年賀状を書いたり、クリスマスを楽しんだり、大掃除をして過ごしている内に残りの1ヵ月も終わってしまいそうです。自分のやるべきことを計画的にこなして、良い年を迎える準備を進めていきましょう。

食事から温活生活

596-ウ 『スープジャーで作る朝ラクスープべんとう』 植木 もも子 || 著 主婦の友社

最近はお弁当箱も進化していて、スープジャーの保温性も高まっています。そのスープジャーを活用して、体が温まるお弁当を作ってみませんか。材料を鍋であたためて、味付けをしたら、あとはスープジャーに入れておしまい。とても簡単に、おいしいスープを作ることができます。毎日飲んでも飽きがこないくらいレシピの種類も豊富に紹介されています。コンソメ系、クリーム系、トマト系、和風と具材を変えながら、色々な味を試して味わってみてほしいです。さらにスープがおいしくなるコツや薬膳についての豆知識なども載っていますので、そちらも参考にしてください。

クリスマスを待ちわびながら

B913.6-ク 『X'mas Stories 一年でいちばん奇跡が起きる日』 新潮社

朝井リョウ、あさのあつこ、伊坂幸太郎、恩田陸、白河三兔、三浦しをんの6人がクリスマスを題材に書いた短編を楽しめる1冊。ここで取り上げておすすめするのは伊坂幸太郎『一人では無理がある』です。不遇な環境に置かれ、クリスマスプレゼントがもらえない子どもたちの元にプレゼントを届ける秘密の組織がある。働くのは、スカウトによって選ばれし精鋭なのだが、その中にいつも凡ミスをする一人の男がいた。なぜ彼がこのチームにいるのだろう。そんな疑問が浮かぶけれど、彼には彼自身も気づいていない能力があったのだった。その能力がクリスマスに奇跡を起こす！！

🐻 2018これを読まなきゃ終われない！！ 🐻

辻村深月さんの『かがみの孤城』が本屋大賞を、島本理生さんの『ファースト・ラヴ』が直木賞を、『魔女の宅急便』や『小さなおぼけシリーズ』の角野栄子さんが国際アンデルセン賞を受賞するなど、女性作家がたくさん活躍した2018年。今年もたくさんの方が話題にのぼりました。みなさんはどんな本と出会ったでしょうか。あと1ヶ月、読み残しのないよう2018年の読書を楽しんでください。

時空を超えて楽しむ女子トーク

388-ハ 『日本のヤバい女の子』 はらだ 有彩 || 著 柏書房

日本の昔話に出てくる女の子たちの中には、誰もが知る有名人(?)もたくさんいます。例えば、『古事記』や『日本書紀』のイザナミノミコト、『落語 皿屋敷』のお菊、『浦島太郎』の乙姫、『堤中納言物語』の虫愛づる姫君など。彼女たちは私たちに強烈な印象を与えますが、実は語られていない部分で彼女たちには彼女たちなりの思いが他にあったとしたら、どうでしょうか。昔話の中の役割を取り払って、一人の女の子として彼女たちの人生を考えてみるという発想で書かれたこの本を読むと、今までのイメージが変わってきておもしろいです。同じ女性としてみなさんはどう感じるでしょうか。

平成最後に平和を願う

913.6-ナ 『神に守られた島』 中脇 初枝 || 著 講談社

ちばりよ 牛よ さったー なみらしゅんどー ふいよー ふいよー
この不思議な言葉は、沖縄から六十キロほど北にある沖永良部島(おきのえらぶじま)という小さな島の島唄です。美しい景色と、優しい響きを持つ島言葉や島唄、あたたかな島人の交流。そうした島の平和を戦争がおびやかしていく様子が主人公の少年マチジョーの目を通して淡々と描かれています。冒頭に載せた島唄は、物語のところどころに登場します。何気ない日常の唄が、戦争という非日常の中では違う響きを持って心に染み込んでくるのを感じてみてください。

🕒 図書館司書の「今月はこの本を読みました」 🕒

11月15日(木)放課後、読書会を開催しました。「3年生になって部活を引退したのでやっと参加できます！」との声に、受験対策への不安がよぎるものの、1冊の本を読みこみ色々な意見を交わすのは、きっとよい経験になるはずと信じて、いつもより多い参加者と本を読み語り合いました。取り上げた本は夏目漱石の『ころろ』(B913.6-ナ 新潮社)です。1学期の読書会では、「上 先生と私」を読みました。そして今回は「中 両親と私」です。自分の『ころろ』を持っている人はその本を読んだのですが、集英社や角川からも出版されており、表紙を見比べると楽しかったです。また、ある部分で使っている漢字が“小供”なのに角川では“子供”になっているなど、自分だけでは気づけない発見もありました。大学を出ても就職を決めず、東京の先生と病の篤い父を比べてしまう“私”は難しい存在でした。3学期には「下 先生と遺書」で読書会をやります。まだ読書会に参加していない人も、次回は一緒に読んで、楽しみませんか。【鈴木】

そうだ、先生と本のことを熱く語ろう!! ~新井先生編~

新井先生(以下 新):今ちょうど気になっている本があるんですよ。『ズッコケ三人組』の著者が『世界一受けたい授業』に出演しているのを見て、小学生の頃、このシリーズをすごく読んでいたことを思い出したんです。

『ズッコケ三人組』シリーズ
那須 正幹 || 著 ポプラ社

司書(以下 司):『ズッコケ三人組』!!懐かしい!!今あの三人が中年になった続編も出ていますよね。

新:当時、すごく好きだったんですけど、今読んでもおもしろいんじゃないかなって思うんです。そんな感じで、昔楽しんでたものをもう一度読むことが多くて、新しいものにもあまり挑戦できなくなってしまっていますね。

司:でも、そうやって、昔読んだ本を大人になってから読み返すっていいことだと思います。同じ本なのに感じ方が自分の中で変化しているのに気がつくのとか楽しいですよ。

新:当時、貸出が読書カードだったんですけど、1枚に10冊書けるから、夏休み前に10枚くださいって先生に頼んだら「100冊読むの?無理でしょ」と言われてしまったんです。それが悔しくて、すごい頑張って60冊読んだんです。その時に『ズッコケ三人組』とか、江戸川乱歩の『怪人二十面相』シリーズを読んでいました。その頃が一番本を読んでいましたね。

913.6-I 『怪人二十面相』
江戸川 乱歩 || 著 ゴマックス

司:新井先生が本を読むようになったきっかけは、何でしたか。ご両親が本をよく読まれる方だったとか?

新:そうなんです。毎週、父が市の図書館に行くんですよ。それに僕もついて行って、父が本を選んでいる間に自分も真似て本を借りていました。両親は寝る前に本を読んでいたの、僕にとっては寝る前に本を読むというのが当たり前の習慣になっていましたね。両親が好きだった歴史の本を自分も読むようになって、関ヶ原の戦いとか戦国武将がすごく好きになりました。中でも、島左近って武将が好きで、小学生で普通は読まないと思うんですけど、その人の本や司馬遼太郎の『関ヶ原』を読んだりしました。

B913.6-シ 『関ヶ原』
司馬 遼太郎 || 著 新潮社

司:素敵な習慣が身についていたんですね。そして小学生で司馬遼太郎を読むってすごい!

新:当時、わからないところもあったと思うんですけど、言葉が全部好きだったので、全部読むことができました。

司:子どもの頃に背伸びをした読書をするのって、理想の読書なんですよ。中学、高校時代はどんな本を読んでいたか。先日、村山由佳や東野圭吾を読まれると教えてもらいましたが、それはこの頃ですか。

新:はい、村山由佳は当時好きだった子に『天使の卵』をおすすめされたのをきっかけに読みました。僕の中学時代ってちょうど山田悠介がすごくブームになっていて、僕はお返しに山田悠介の本をおすすめしました。

あの人の本ってアイデアが素晴らしいと思うし、発想が好きでしたね。

あとセカチュー(『世界の中心で愛をさけぶ』)とか、綿矢りさの『蹴りたい背中』も読みました。その頃、自分でも詩を書いていて、その流れで小説も書こうって気持ちもあったんですね。そこに中学生でもわかるような芥川賞って大きな賞を大学生が受賞したので、「どんな本を書くんだろう」と興味が湧きました。

司:綿矢りさの『蹴りたい背中』と、金原ひとみの『蛇にピアス』の芥川賞W受賞はあの時、衝撃でしたよね。

913.6-ワ 『蹴りたい背中』
綿矢 りさ || 著 河出書房新社

新:衝撃でした。それまで本は借りて読むものって意識でしたけど、綿矢りさや山田悠介、セカチューで、初めて自分で本を買いました。だから、記憶に残っていますね。

司:新井先生は、好きな作家さんがいてその人の本を読む、というより、作品でおもしろそうだなと思った本を読むタイプのように話を聞いていて感じます。

新:そうですね、でも、村山由佳は違いますね。僕は小説を通して、ちょっとでも作者の色というか性格というか生活みたいなものが感じ取れる方が好きなんです。なおかつ、村山由佳の場合は女性だし、こういう本を書くこの人はどんな人なんだろうと興味があります。

司:村山さんの作品だと、私は『天使の卵』と、その続編『天使の梯子』、あとは『星々の舟』を読んでいます。あれを読んで、村山さんってこんなテイストも書くんだったって驚きました。

新:『星々の舟』、あれはすごいですよ。連作短編になっていますけど、お父さんの回があそこだけ異色というか雰囲気が変わっていたのを覚えてますね。

913.6-M 『星々の舟』
村山 由佳 || 著 文藝春秋

司:私もやっぱりお父さんのイメージが強く残りました。あと、せっかくなので東野圭吾の話も聞かせてください。

新:東野圭吾はおもしろい本が読みたかって思って、巡り合った本ですね。あと、感動したって思ったんです。本を読んで泣きたいって思ってたどり着いたのが東野圭吾でした。結果、全然泣かなかったんですけど(笑)

司:(笑)じゃあ『天使の卵』を読んだ時はどうでしたか。あれも泣ける本だと思うんですけど。

新:どうだったかなあ。びっくりしたのは覚えているんですけど、泣いてはいないと思います。ただ、おすすめしてくれた子は、こういう物語で感動するんだなと思いました。東野圭吾の『秘密』はどうでしたか。おもしろくなかったですか。

B913.6-七 『秘密』
東野 圭吾 || 著 文藝春秋

司:いえ、すごくおもしろかったです!

新:あの結末は、男性と女性とで捉え方が違うんじゃないかなと思うんですよ。男としてはヤキモチを妬くけど、女性からすると「それはしょうがないよ」と肯定的にとるのかなと。感動しているどころじゃなかったですね。

司:ああ、でもそうですね、女性からするとそんな躍起にならなくても…とは思うかもしれないですね。

新:今思い出しましたが、怖い本を読みたくて貴志祐介の『黒い家』を読んだんですけど、あれ僕、結構好きです。論理的に怖いんです。こういう理由で、こんな人間が現れて、襲ってくる、というのが丁寧に説明されているから、「それは怖いね」ってなるんです。怖い本が読みたい人にはぜひおすすめです。

司:本を通して、作者の人間性を知るのが好きということですが、自分の人間性も知ってもらえるのはどうですか。

新:好きですね。もう丸出しです。昔から自己表現するのが好きだったので、詩を書いたりもしたし、今はラップをしているし、仕事で授業やプリントを作るのもある意味、自己表現だと思っているので、楽しいですね。

司:人間性って、自分と似た考えを持つ人が好きとか、全然違う人の方がおもしろいとかってあるんですか。

新:うーん、異性の書くものには興味がありますね。最近だと、さくらもこのエッセイがおもしろいと聞いたので読んでみたいと思っています。あ、『十二国記』って知っていますか。あれはめっちゃめっちゃおもしろいです。

司:小野不由美の作品ですね!これも懐かしい。

新:今、異世界転生ものとか流行ってますが、『十二国記』は元祖ですよ。あれは現実逃避にはもってこいですね。あとは高校生が主人公だから、みんなにも楽しんで読んでもらえるんじゃないかな。

B913.6-オ 『十二国記』シリーズ
小野 不由美 || 著 講談社

司:うんうん!『十二国記』いいですね。図書館で再燃してブームが起きてほしいです。